

言語獲得とカテゴライゼーションについて

西 川 盛 雄

Remarks on Language Acquisition and Categorization

Morio NISHIKAWA

(Received May 23, 1994)

The present paper aims at investigating and exploring certain aspects of language acquisition in newly born infants in terms of the cognitive process of categorization. The process of language acquisition is cognitive, and language is a reflection of the cognitive process of understanding the world. The earliest stage in acquiring language by a human being occurs with the learner's ability to categorize items. Categorization can be considered to be the cognitive process of differentiation between one thing/person and another thing/person. Deixis and the process of naming emerge at a very early stage in language acquisition. One-word or two-word sentences are readily produced in the interactive process of socialization between a child and its mother. Our discussion in this paper examines the following three questions: (1) In terms of language acquisition, what is the first task a newly born child has to accomplish after his/her birth? (2) What linguistic aspects are involved in this task of cognitive categorization? (3) How can we redefine the ability to produce and use language in terms of the cognitive process of language acquisition? Our data mainly come from a corpus of one-word and two-word sentences. This paper concludes by emphasizing the need to produce a hypothetical cognitive model for language acquisition.

Key Words: categorization, deixis, differentiation, LARSP, clinical linguistics

1. はじめに

言語獲得のメカニズムはこれまで常に人間の謎のひとつとして議論されてきた¹。しかしその真実は必ずしもまだ明らかにされているとはいえない。一般的にこの世に生を受けた人間は少なくともひとつの母国語を獲得することができる。さらに必要に応じて複数の外国語の獲得も可能である。またバイリンガルのように同時にいくつかの異なった言語を獲得、かつ使用することも可能である。人間に内在化されてある言語能力と言語獲得のプロセスとはどのようなものなのだろうか。古典にして現在も大きな影響力をもっているピアジェ²とヴィゴツキーは発達心理学の分野で内言、外言の視点において立場こそ異なるが幼児の言語獲得のメカニズムを解明しようとして理論的、臨床的な両面において画期的な仕事をした人たちであった。ワトソンに始まるスキナーなど行動主義心理学者の考え方も刺激 (stimulus) に対する反応 (response) と強化 (reinforce-

本稿は平成5年8月3日, 第17回九州地区難聴・言語障害教育研究大会において講演発表を行ったものに加筆修正を施したものである。

ment) を機軸に理論的發展がなされ、オペラントのストラトジーを仮説し、そのメカニカルな考え方ゆえにさまざまに批判されてはいても操作的・臨床的な具体的な場においては依然として強い影響力をもって今日まで来ている。

最近の生成文法理論ではチョムスキーが言語獲得の生物学的基礎にもとづく生得説を軸にかけてスキナーの行動主義的視点をはげしく批判してから、普遍文法 (Universal Grammar) の存在を前提にして生成文法における仮説をさまざまに改訂・修正しながら今日に至っていることはよく知られている。たとえば言語の普遍文法の説明原理として、構造依存性 (structure-preserving)、ヘッド・パラメータの視点、X バー統語理論、投射の原理、Theta 役割、統率と束縛 (government・binding) の基本概念等にしても普遍文法の説明的妥当性 (explanatory adequacy) の観点から言語を説明する方策として参考にするべきことは多い。しかし言語獲得のプロセスの発達の、臨床的な面における具体的なケースの解明についての公正な評価はいましばらくの時間的猶予が必要であるだろう³。

ここで注目すべき足跡としてイギリスの Crystal (1979) らの LARSP (Language Assessment Remediation and Screening Procedure) のチャートがある⁴。これは言語発達と臨床的な側面を加味した発達診断的なチャートである。発達の段階 (Stage) を 7 つに分け、第一段階を 9 か月から 1 才 6 か月、第 2 段階を 1 才 6 か月から 2 才までとし、以後 6 か月ごとに 4 才 6 か月以降にまで分けている。そしてそのそれぞれの段階で言語の意味と統語形式の獲得状況が記述的なデータとして把握されていく仕組みになっている。その言語学的な根拠はむしろイギリス流の伝統的な文型パターンと文法機能の分類であるが、主として統語論的発達の「程度」(gradability) の記述説明に主眼点がおかれている。それは子供の発話の反応の正常性とそれからの逸脱を発達の・臨床的な視点においてみるという新たな注目すべきひとつの提案であった。

本稿では言語獲得の問題を、生命体としての人間の認知言語学的なパースペクティブにおいて考察していこうとするものである。ここでいう認知とは人間がこの世に生をうけてから「知」に関わって最初に行う仕事として位置づけられている。また認知とは人間があるものと別のものを識別し、言語記号によって範疇化あるいはカテゴリー化するひとつの「知」の行為として位置づけておきたい。この行為は本論でも述べるように人間が記号としての言語によって外の世界を「分ける」ことすなわち「分かる」こと、周囲の世界の見方、切り方をよりきめ細かなものにすることなど、あるものと別のものとの差異を認知するカテゴリー化 (categorization) のプロセスとそれを可能にさせる認知のモデルにつながっていることを前提としている。そしてこの認知のモデル⁵によって人間は知の発生と発達のプロセスを言語によって証しするものとして考えることができるのである。

考察にあたってここでは子供、とくに新生児あるいは乳幼児の初期の言語獲得の問題と言語障害あるいは伝達障害 (communication disorders)⁶ といわれる臨床言語学 (clinical linguistics)⁷ 的な領域特に構音障害の問題を考慮に入れている。そして本稿の構成は次の 4 点を主眼として考察を試みようとするものである。

- (1) 人間はこの世に生を受けてから言語に関わって最初にするものは何か?
- (2) その諸相はどのようなものか?
- (3) 言語能力とは言語のどういう能力のことか?
- (4) 結び

(1) は人間の知的作業の始まりには認知的行為として分ける／分かるという知的過程のあることについて考察してみる。(2) は一語文、二語文を中心に意味と文法の認知的側面について触れる。(3) では言語能力 (competence) の概念規定を明らかにして言語獲得過程における「知る」ということの意味を考察する。(4) では本稿のまとめに替えて、言語と認知の問題を通して言語観について考察を加えてみたい。

2. 人間はこの世に生を受けて言語に関わって最初にすることは何か?

Homo sapiens ともいわれ思惟の世界をもち、Homo ludens において遊戯性、創造性を豊かにし、Homo faber の側面において道具を工夫、改良して文明をつくりあげてきた人間は言語に負うところ大である。しかしそれにもまして Homo loquens (話す存在としての人間) という側面は人間にとって本質的である。一人の新生児、あるいは乳幼児に焦点を当ててみた場合、人間は素朴に言語の獲得とその使用に関わってどのような存在なのであろうか。

この世に生を受けた新生児はその生命的知的作業をどこから始めるかという問題は人間存在においては本質的である。人間は確かに社会的存在として自ら生きていく人間関係の網の目からなる社会的な場において、「文化・環境」の果たす役割は大きい。それと同時に人間はひとつの生命体としてその生物学的側面もまた存在する。そしてそれは丸山 (1983:67) もいうように「人間はランゲージュの所有によって動物とは断絶し、二つのまったく質を異にする構造、すなわち種のゲシュタルトと文化のゲシュタルトの中に生きている」と言うことになるのである。

ポルトマン (1961:101) は「人間の生後第一年は三つの重要な出来事によって特徴づけられる。つまり、それは直立姿勢をとること、ほんとうのことばの習得、そして、技術的な思考と行動の領域へ立ち入ることの三つである」と言っている。この「ほんとうのことばの習得」に関していえば、新生児の言語獲得の潜在性はすでに胎内の時から始まっているともいえる。ある一定の発達を遂げた胎児はすでに外界からの音響的刺激などに有意な反応を示しているからである。

生後まだ間もない乳幼児は英語で infant であるがこれは「未だ話せない存在」という語源的意味をもっている。この観点からすると、成長とは「言葉が話せる存在」となる、ということになるがその謂いは記号としての言語によってこの世を分け／分り始める認知のプロセスが深く関与しているといえよう。このことは岡本 (1985:26) が

- (1) 「子どもがことばを生み出すということは、子ども自身がシンボルの世界に生まれ出ることにはほかならない。まさしく子どもはシンボルの世界に目ざめたのである。」

というとき、この「シンボルの世界に目ざめる」ことはすなわち記号としての言語による認知のプロセスが実を結びはじめたことの謂いにほかならないのである。

ここでいうシンボルは C. パースにならってアイコン (図像)、インデックス (指標)⁸ と並んで記号の一種であるが、特に分節的な側面における多様性と創造性において人間に特有なものといわれるのがシンボルである。シンボルはローマン・ヤコブソン (1980:96) が妻ポモルスカヤとの会話の中で述べているように、「記号表現と記号内容の間の事実上ではなく定められた、慣習によるつながりの上に基礎づけている」ものである。そしてこのシンボル形成はそれを用いる生命体(人

間)の記号の獲得とその操作的な使用 (use) のプロセスに関わっている。獲得された記号はそれが何を指示 (refer to) しているかという「意味」の問題以前に、その記号を用いて世界をどう見ているか、あるいはどう切り取っているかという記号使用者の認知的視点が重要になってくる。そしてこのときはじめて獲得されたものの使用という点で言語はシンボルとして具体的でかつ操作的なものになってくるのである。

たとえば素朴にある動くものに対して「ブーブー」という記号をある場面で、ある人に、ある意図をもって発した場合、発話行為としてはひとつの目的をもった振る舞いである。そしてオノマトペ⁹を使った「ブーブー」という言い方で、さまざまな条件の下で、ある動くものとそれ以外のものを識別している限りにおいて、ひとつの認知的な行為がそこで実現しているといえるのである。また、英語で乳幼児が“there”と発話したとき、ここでは聞き手に注意を喚起し、伝達の場を共有してもらうべく直示的な (deictic) 指差し行為 (pointing)¹⁰ がともなっている。またこれは発話者の思いを聞き手に提示するというひとつの発話行為であり、あるモノ／ヒトに対する方向と位置の概念が発話のリアルな場において形成されつつある証拠なのである。シンボル形成とはこのように認知的行為のひとつの現れに他ならないのであるがそのもつ意味は I/here/now¹¹ における自らの存在の証しとして捉えることができるのである。今西 (1987:70) は「先行詞の範疇にかかわりなく、直示的に用いられる照応表現が早く出現する」といっている。そしてこれらは早い段階においては指差し行為や身ぶり (gesture) を伴って用いられるのである。

言語 (ここでは母国語である第一言語) の獲得は生命体として外的世界との接触とその識別から始まる。この接触・識別こそ認知言語学で言うカテゴリー化の始まりであるといえよう。それはほとんど生命体としての人間の生存に関わるプリミティブな本性からくるものと考えられる。

従来認知 (cognition) あるいは推論 (reasoning) は人間の身体から乖離した抽象的、概念的、形而上学的なプロセスとして考えられてきた。そしてその真理価値 (truth value) は事物 (object) や事態 (a state of affairs) との対応関係において与えられた命題 (proposition) が真 (true) であるか偽 (false) であるかが客観的に計算されるようなかたちをとっていた。ここでは人間の「思考」の世界が身体的な基礎付けをもたず、いはば形而上学的なものとして抽象的に形式化されてきたのである¹²。しかし、人間の認知、あるいは推論のプロセスは実は身体から乖離したものではなく、生命体としての人間の生存に関わって分ける／分かるという差異の認識によるカテゴリー化のプロセスにおいてどのように経験を意味付け、秩序づけていくのかということと密接な関係をもっている。表現が豊かになり、この世に生を受けてから叫喚期、喃語期を経て、一語文から二語文、三語文、多語文と表現が複雑になっていくということはこのカテゴリー化のプロセスが拡張 (expand) していくプロセスと考えることができる¹³。このことを端的に認知のプロセスとしたらここで基本に流れている考え方は Lenneberg (1967:336) に従って、

(2) Words do not refer to real things but to cognitive processes.

ということになるであろう。語がその指示的機能において関わっているのは物理的、物質的な意識外のモノ／ヒトに対してではなくむしろ人間 (発話者) のメンタルな認知のプロセスというわけである。だとしたら、語は即物的、物理的なモノ／ヒトの反映ではなく、むしろメンタルな表現と理解のプロセスそのものの実現ということになりはしないであろうか。次の例は発話が二語文、三語文さらに多語文に「拡張」されていくときの一例である。

- (3) a. daddy go / kick ball
- b. daddy kick ball
- c. daddy kick ball window
- d. in the box
- e. in the big box

(Crystal 1981:101)

この拡張とは、上のように語配列の統語的拡張だけでなく幼児が成長するにつれて次のようにさまざまな種類となって表れてくる。名詞にあつては単数・複数等の数の概念、普通名詞や抽象名詞など名詞が指示するものの具体性／抽象性の概念、動詞にあつては時制などの時間の概念、あるものがある動作や状態の過程にあるプロセスの概念、形容詞や副詞にあつては名詞や動詞に対して示す修飾の程度や比較の概念、ダイクシスにあつては人称や場所や時の直示性の概念、動詞に対する名詞（句）の意味役割については語彙の意味構造から投射（project）される項構造（argument）の概念、等々である¹⁴。これらは発達の過程で相互に上記のさまざまな要素が組み込まれて発話された文がやがて豊かに、複雑になるに従ってカテゴリー化されていくダイナミックな認知的プロセスを表しているといえよう¹⁵。

新生児は、モロー反射、目でものを追いかける、指や手を動かしてさわる、聞き耳を立てる・・・等々、こういった初期の発達過程のなかで外界との接触を豊かにしていく。そしてその接触を通して周囲の世界への関心を増し、対人関係を調整し、それを理解し、体系づけていこうとする。ポルトマン（1961:39）は人間が母の胎内で成長をつづけ、やがて五か月目の発達段階で出生すると述べたあと、「人間の新生児は不思議にもおそろしく未成熟で能なしである。」といい切り、この「能なしの新生児」がやがて言語によって「知る」という行為を積み重ねていく経緯のなかで他の動物をよせつけない程「知」において発達を遂げた生命体に変化していくことを指摘している。この世に生を受けた新生児は周囲のモノ／ヒトが自分にとってどういう存在であるのか、またモノ相互が、あるいはヒト相互がどのような関連性にあるのか、その関連性の網の目の総体として周囲の世界を少しずつ秩序づけ（構造化）を行っていく。そして発話は具体的な生活場面の中で常に状況と関連したところで相手に自らの気持ちや意図を伝えていこうとするものである。そしてこの世に生を受けた後、乳幼児は母親を始めとして周囲の人たちとのさまざまな人間関係の渦中におかれ、言語的刺激をうけていくのである。

ここで、村田（1984:33）は「言語的な音声が母子とのあいだで交わされるようになるとはつきりいえるのは、1:6 以後のことである。このような言語的相互作用の形成は、〈対話の成立〉¹⁶と言ってよいだろう。相手の要求・経験・考えをうけとり、これに応じて言語的に反応し、しかも相手を意識して伝達内容を調整するところに真の対話が形成されてくる。」と述べている。このことは、母子との間で交わされる情緒的やりとりによる知的発達が確かなものになっていくことと深い関係にあるといえよう。そしてこの「対話」を通して幼児は言語使用上における制約や認知上の諸原理を獲得していくのである。

たとえば、語用論の発話行為の立場に立てば、「パパ」と発話した場合、この乳幼児にとって実際の父親を指示（refer to）しているというよりも、この発話を通して父親、あるいは周囲の人に自分のほうに注意を向けさせようとしている。その意味で直示的に聞き手に注意を喚起する目的をもったひとつの発話行為（speech act）を成していると考えることができる。これは Jakobson（1960）の術語を借りていえば referential（指示的）な機能というより、人との接触において友好

的であるかあるいは友好的でないことの情を表す phatic (接触的) な機能, あるいは発話が聞き手に何らかの具体的な効果／結果を及ぼす conative (動能的) な機能の実現にむしろ近くなる。事実, 幼児は言語獲得プロセスにおいてはまず指さし行為に代表される直示的な行為からはじめる。そして対象となるモノやヒトを識別して指示詞を用いながら直示的な照応表現を行うのである。命名による認知行為は次の段階で実現される¹⁷。

ここでは, この「パパ」という発話はまず第一に「パパ」という語彙 (記号) によってある「パパ」と呼ばれる存在を指示している。これは意味論のプロセスといえよう。第2に「パパ」と呼ばれる存在に発話行為的に何か発話者の意図を伝え, 聞き手に何らかの動きをしてもらおうとしている。これは語用論のプロセスである。第3に「パパ」という記号操作によって「パパ」と呼ばれるヒトとそれ以外のヒトとを分け／分かるという操作的な認知的行為をすることになる。ここに認知論的に差異化現象 (differentiation) が実現されていることになるのである。これは認知論のプロセスといえよう。そしてこれら三つの側面はひとりの乳幼児の言語獲得のプロセスにおいて互いに別々に作動するのではなく, 同時進行的にあるいは相補的に働くのである。

「知」の始まりは同時に生命体としての人間の素朴な思考の秩序づけとその変容の始まりである。その秩序づけとその変容こそ記号操作の在りようであり, 周囲の外的世界の切り方, あるいは見方の在りようなのである。この「知」の始まりに関与しているものが他ならぬ記号の一種としての言語である。つまり記号としての言語によってわたしたち人間はすでに新生児あるいは乳幼児の時期から分ける／分かるという認知的過程を開始するといえるのである。

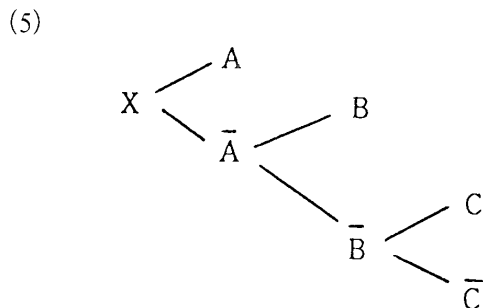
ここで分ける／分かるという言い方をしたがこれは認知言語学の領域でいう Lakoff (1987:68) の理想認知モデル (ICM) の獲得に深く関与している。あるものを別のものから分けてその差異を識別するという知的営みは単なる分類や命名作業のみならず人間が人間として存在する生存の証しともいえるものなのである。その生存の証しを可能にしていくものは記憶され内在化されてある人間の「知」の原型の獲得であるといえよう。さらに北原 (1994) も指摘しているように, 「分ける」「分かる」はまた「分かれる」に通じ, 認知の領域がさらに細かく分化していくのである¹⁸。具体的には語彙や文法の使用方策が複雑できめ細かくなっていくのである。また, 身体の五感を通して熱いものと熱くないもの, 堅いものと堅くないもの, 大きなものと大きくないもの, 動くものと動かないもの, 食べられるものと食べられないもの, 快なるものと快でないもの, 等々の差異を識別していくことは幼児の「知」に関わって言語獲得とも密接な関係にあるといわざるをえない。

このカテゴリー化とは一般化していえば, あるもの (A) と A でない別のもの (\bar{A}) とを分ける差異化現象 (differentiation) のことである。そして Lakoff (1987:5) はカテゴリー化の重要性とその過程を軽んずべきでない視点から冒頭で次のように述べている。

- (4) Categorization is not a matter to be taken lightly. There is nothing more basic than categorization to our thought, perception, action, and speech. Every time we see something as a kind of thing, for example, a tree, we are categorizing. When we reason about kinds of things — chairs, nations, illnesses, emotions, any kind of thing at all — we are employing categories.

この過程はひとつの認知行為のプロセスである。歴史的にはこの用語の発想の始まりは F. ソシュールの signifiant (能記) と signifié (所記) の弁別につながっているが, 言語の音声レベルにお

いては、後にヤコブソンとハレの提唱した差異化現象を前提にした弁別的特徴 (distinctive features) の基本概念を想起させる。この差異化現象のプロセスを分化というカテゴリー化の視点から概ね図示すれば以下になるであろう。



このように「ある何か (X) を A であるものと A でないもの (\bar{A}) とに分ける／分かる」という認知のプロセスは言語記号の操作的側面と相俟って人間にとって本質的である。そして発話者の語彙や文法ルール応用の複雑になるにつれてその発話者の世界がより細かく分化され、詳細になっていくのである。ここで、大切なことだが、この分化という認知のプロセスにおいては機械的な二者択一でなく何処までもファジー (fuzzy) な部分が存在しうることを念頭においておかなければならないことはいうまでもない。

記号の一種としての言語はシンボルとしてその機能を全うするためには実際に用いられなければならない。使用する (use) という行為が言語を語彙や慣用句の数など量的にも、文法ルールや意味内容など質的にも豊かにしていくのである。さらに「使用する」というとき、乳幼児の場合そこに生命体としての生存のための必要性がなければならない。人間はひとつの生命体として言語を使うことによって自らの生存の証しを為すからなのである。

乳幼児はこの世に生を受けて最初は叫喚期と呼ばれる生存の叫びの時期を経てかなり早い時期に喃語期に入る。ここは将来出現してくる子音、母音の素朴な可能性が試行的にさまざまに経験されていく時期である。このころから乳幼児は混沌として、いはば「何がなんだか分からない周囲の外界の世界が何がなんだか分かりはじめる」のである。このプロセスを「分かる」という言い方をしてみたがこれは同時に「分ける」という言い方に通じるものである。つまり乳幼児は自分の人間としての生存を「分ける／分かる」という認知的な作業から始めるといえる。カテゴリー化とはこの謂いである。次の例は一語文の例である。

- (6)
- | | | | |
|----|--------|--------|------|
| a. | papa | (パパ) | |
| b. | mama | (ママ) | |
| c. | kukku | (クック) | <靴> |
| d. | taatan | (タータン) | <靴下> |

- (7)
- | | | | |
|----|----------|----------|------|
| a. | nyaanyaa | (ニャーニャー) | |
| b. | wanwan | (ワンワン) | |
| c. | buu | (ブー) | <豚> |
| d. | jiitan | (ジータン) | <祖父> |

- | | | | |
|-----|--------|--------|---------------|
| e. | baatan | (バートン) | 〈祖母〉 |
| (8) | a. | oichii | (オイチー) 〈おいしい〉 |
| | b. | majii | (マジー) 〈まずい〉 |
| | c. | atti | (アッチ) 〈熱い〉 |

(柴田 1990:3-5)

乳幼児が(6)の例のように「パパ」「ママ」といい、(7)の例のように「ジータン」(おじいさん)「バートン」(おばあさん)といい、「ニャーニャー」「ワンワン」というとき、ひとつの基本的な差異化現象にもとづく認知作業として「パパ」とそうでないもの、「ジータン」とそうでないもの「ニャーニャー」とそうでないものを識別して自分なりに命名(naming)をし、その命名のプロセスを通して自己とモノ／ヒトとの連関性を理解し、周囲の世界を秩序づけていく¹⁹。

さらに(8)の例のように、乳幼児は身体的に五感をフルに活用させて、先に述べたように触れてみて、熱いものと熱くないもの、柔らかいものと柔らかくないもの、視覚的に、円いものと円くないもの、動くものと動かないもの、聞いてみて、大きな音、小さな音、快なるものと不快でないもの、味わってみて甘いもの甘くないもの、おいしいものとおいしくないものなどに分けて識別・理解する。

このように幼児は言語を通して外の周囲を分化させ、秩序づけていくとすれば、人間はこの世に生まれてきて言語に関わって最初にする仕事は分ける／分かるという差異化現象を前提にした認知的営みとしての範疇化(categorization)であるといえる。そのことは同時に自己と周囲のモノ／ヒトとの連関性²⁰を把握していくことにもなるのである。

3. その諸相はどのようなものか?

その諸相には言語学の部門(component)として、主として音声に関わる音声／音韻論的なもの、語形成のルール性に関わる形態論的なもの、さらに文形成のルール性に関わる統語論的なもの、さらに意味論、語用論的な面がある。

音声は単なる音(noise)ではなく意味を担う言語の基礎的なものである。そして音声には一方では子音と母音の組み合わせがあり、もう一方では抑揚・韻律, Stress, イントネーションなど音声の流れとしてのリズムがある。この音声において分ける／分かるというカテゴリー化のプロセスは抑揚・韻律等のパターンのみならず、言語学の古典といえるヤコブソンとハレの弁別的特徴にその典型をみることができることは既に前章で述べた。

たとえば[p] [b], [s] [z]の違いはそれぞれ有声音／無声音, 破裂音／摩擦音, 両唇音／歯茎音など音固有の特徴が絡み合っている。これは[p], [b], [s], [z]それぞれの音声単位が他の音声単位から分けられ、差異が識別され、結果としてそれとして認知される根拠となっている。破裂音の獲得のされ方とその順序については以下のような分け方／分かれ方をすることが知られている。

ここで音声の側面から音声単位の差異化をめぐる乳幼児の初期の言語発達過程における伝達障害(communication disorders)のケーススタディ、特に典型的な構音のケースをみてみたい。

- (9) a. [karasu]
 b. *[tarasu]
 c. [kame]
 d. *[tame]
- (10) a. [sakura]
 b. *[takura]
 c. [oniisan]
 d. *[oniitan]
- (11) a. [rappa]
 b. *[appa]
 c. [gomu]
 d. *[omu]

この例は乳幼児が構音を獲得していく発達過程でよくみられる例であるが、(9)では [k] と [t]、(10)では [s] と [t] の置換 (substitution) がある。[k] は破裂音、無声音、軟口蓋音である。[t] は 破裂音、無声音、歯茎音である。また [s] は摩擦音、無声音、歯茎音である。従って両者の差異は軟口蓋音と歯茎音の違いである。ところがヤコブソン (1976) によれば破裂音で無声音を獲得する順序は [p] → [t] → [k] であり、有声音は [b] → [d] → [g] であり、通鼻音の場合は [m] → [n] → [ŋ] である。さらに相対的には摩擦音よりも破裂音が先に獲得されていくことはよく知られているところである。従って (10b) (10d) などの置換は発達過程上いつの間にか解消されていく場合が多い。(10)のように [t] を通って [s] に至るプロセスは十分考えられるからである。また上例 (9) のように本来 [k] であるべきところが [t] に代置されているとしてもその獲得の順序性の観点から当然通るべき一時期として考えることができるのである。[t] を通って [k] に至ることも十分考えられるからである。また、(11) の場合は音声の省略であるが、弾音 (retroflex sound) の [r] が獲得され発音されるのはずっと後になってからである。言語獲得のごく初期に出なくても理由のあることであると考えることができる。

ここで問題は子音間の差異の認知と、それが何によって、あるいはいかなる条件下において可能なのかということである。基本的に、差異の認知は分ける／分かるという認知的なプロセスである。その根底にはこのプロセスを可能にするものが記憶され、内在化されてあると仮説することができる。そしてこの記憶され、内在化されてあるものによって逸脱している発話が音声、文法、意味のレベルでそれぞれに修正を受け、より妥当な表現に変化していく。子音、母音の組み合わせにおいても、また子音、母音の個別の音声単位においても乳幼児はこのように分ける／分かるという認知的なカテゴリー化のプロセスを通して理解していこうとするし、このプロセスのなかで複雑な外的な世界をより緻密に見つめ、聞き取り、やがて妥当な音声を獲得・使用していくのである。

乳幼児がこの世に生をうけて言語獲得をしていく根底に何が獲得されていくのかを考察してみたとき、ここでいうカテゴリー化のプロセスをサポートし、可能にさせるような認知のモデルが獲得されていていっていると考えることができる。

確かに近年、言語の発達と子どもの認知能力の間の関係の研究に焦点が置かれてきている。認

知言語学の発展はすでにこのことを明示してくれている。Lakoff(1987)はヴィトゲンシュタインからロッシュまでの知の系譜をたどりながらプロトタイプ効果について述べたあと彼の考え方の中心的テーゼとして理想認知モデル(ICM:idealized cognitive model)を提出している。この発想はカテゴリー化のプロセスをサポートし、可能にさせるものの由来を考察する上で示唆的なものである。このことは次に述べる言語の意味と文法との関係についてもっと顕著であるといえよう。

Lenneberg (1967:333) は彼の生物学的な基礎づけにおいて言語を考察していく上で

- (12) Words are not the labels of concepts completed earlier and stored away; they are the labels of a categorization process or family of such processes. Because of the dynamic nature of the underlying process, the referents of words can so easily change, meanings can be extended, and categories are always open. Words tag the processes by which the species deals cognitively with its environment.

と主張している。語はカテゴリー化という認知過程におけるラベル付与という訳である。ここで乳幼児が過渡的に通過する一語文、あるいは二語文について言語獲得の面から考察してみたい。例えば幼児が靴のことを一語文で「クック」という場合、場面によっては靴だけでなく靴下だったり、他のはきものだったりする。そしてこれはやがて意味論／語用論的な修正を受けて分化されたそれぞれに妥当な言い方に変化していく。この場合「クック」が何を範疇化するかということに加えて「クック」という言い方を通して発話者がどのような意図を聞き手に伝えているのかという視点が重要なものとなる。その場合、「クック」と「クック」以外のものとに分けることによって分かるという認知的行為を遂行しているといえるのである。

言い替えれば、あるものが目の前にあり、それを「分ける」「分かる」という認知的行為においてある解釈を施した時点で、対象物である靴と言語記号である「クック」が結びついてくる。このとき靴と靴以外のものとの差異についての認識が前提となってくることは重要な点であるだろう。このことは乳幼児が「他でもない、これは自分にとって、こういう意味のあるものものなのだ」という価値づけを言語記号によって与えていると考えれば、一語文とはこのように認知行為のひとつの反映として理解できるのではないだろうか。

一語文は文字どおり形式的には一語であるが機能的にはひとつの発話であり、ひとつの統語論的文法的カテゴリーに属してしまうものではない。つまり語によって文(sentence)の機能をはたしている発話である。例えば一才ころから動作をあらわす

- (13) 「ネンネ」(寝ること)
 「タッチ」(立つこと)
 「チッチ」(おしっこをすること)

などの一語文がすでに現れてくる。直示的な

- (14) 「ココ」
 「アッチ」

感覚的な

- (15) 「イタイヨー」
 「オイチャー」(おいしいこと)
 「アッチ」(熱いこと)

なども一才半ごろまでに現れてくる。動物の鳴き声、たとえば「ワンワン」を犬以外の四つ足の周囲の生き物にも般化 (generalize) して用いることはよく知られているところである。このように乳幼児は一語のなかに多くの情報量を含んで言いたいことを伝達しようとしているのである。

これらは一語文である以上句を中心にした文法規則がまだ現れていない。少なくとも語や句の配列における複雑なルール性ということはまだ問題にならない。しかし認知論的には分ける／分けるという知の作業が実現されていることは否定できない。

英語の場合、Crystal ら (1976) の LARSP の Stage I には一語文のもっとも早い時期に出現する語彙のひとつとして *more* が取り上げられている。*more* は基本的に「比較」の概念を表す。あるものと別のあるものとの違いを前提にした比較である。*more* はもともと量的に「もっとたくさん」という概念であるが、あるものの数や量のみならず形容詞や副詞で代表されるような「比較」の概念を表す場合にもこの表現がよく用いられる。さらにある場面における自らの欲求のより大きな充足を望む場合にもこの表現が用いられる。と同時に比較は「程度」を問題とする。あるものと別のものとの違いを一定の基準において「程度」の差として分け／分けるという識別を行っていると考えられるのである。このように乳幼児は周囲の世界の同質性と異質性を程度の差において理解するという知的営みを発達のごく初期の頃から行っていると考えられるのである。

二語文は一語文からの分化として文法規則の獲得過程においては重要なものである。言語の離散的 (discrete) な記号配列の統語レベルでの始まりがこの二語文なのである。しかしこの配列は「主語＋述語動詞」といった紋切り型の単純なものではない。むしろその結合様式は複雑である。柴田 (1990:111) もいうように、「人間は最も言いたいことから表現し始める」のであろうか。「語順の違いは間接的にその発言者の心理状態をも伝達している」のである。心理状態である以上情報伝達における焦点 (focus) と前提 (presupposition)、あるいは新情報、旧情報の配列のあり方は、乳幼児においては文脈・状況から大きく影響を受けており、伝達における強調 (力点) のおき方次第で統語論的な語順は比較的自由に変化する。したがって乳幼児の言語獲得にあっては語順は絶対とはいえない。たとえば

- (16) a. タベル リンゴ
 b. リンゴ タベル

のような表現は乳幼児にあっては併行して発せられてくるような場合が少なくないのである。ここでは語順の後先をいうよりも、言語獲得上の過渡的なものとして理解することができる。

- (17) パパ クック

の場合、呼びかけて父親に何かを要求している、つまりこの二語文は呼びかけの対象 (「パパ」)

と意味論的指示対象（「クック」）との連携によるひとつの発話行為と考えられる。しかしこの二語文によって発話者の意図しているところは依頼，教示，警告などといったひとつの発話内行為として考えることができる。この場合，認知論的には二重のカテゴリー化が機能しているといえる。発話者にとっての「パパ」という存在，さらに「クック」というモノの意味論的認知，そしてその「クック」に関わっている発話者にとっての目的あるいは価値認識，そしてこの他ならぬ「パパ」と「クック」という存在の発話者に対してもっている価値的意味合いが大きく関与しているといえるのである。

柴田（1990）の調査によれば最初に発した二語文は「ネンネ・ココ」である。ここではすでに近接の直示的な表現が表出されている。また「ネンネ」はモノとして何かを指示しているというより発話者または他者のある状態（寝ること）への欲求の意思表示として捉えることができる。

「ママ ナイヨ」（ママがいない）の場合は存在概念の否定の意味合いが入っている。このことは主語が有性の場合と無性のモノの場合とによって存在表現の在りようが異なるということについての認知的モデルがまだ形成されていないところから生じてきている。例えば下の例のとおりである。

- (18) a. パパ イナイヨ
b. *パパ ナイヨ

- (19) a. *ジンゴ（りんご） イナイヨ
b. ジンゴ ナイヨ

このことは同時に否定的（negative）な直示性の表出にもなっている。このように見てくると「主語＋述語動詞」の結合はけっして二語文の典型をなすものではないといえる。

このことは英語でも基本的に同様である。たとえば，次の二語文の例で，

- (20) a. Mummy juice
b. doll shoes
c. more cookie

(Bloom & Lahey 1978:208, 222)

(20a)では“Mummy”で呼びかけ，他にもない Mummy に juice に関して何かしてもらいたいことを意思表示している。(20b)ではひとつの発話行為ではあるけれども結果として名詞＋名詞の複合語を形成し，先行の名詞（doll）は後に来る名詞（shoes）を意味的に下位範疇化している。

一般的に幼児の言語獲得において内容語（content word）より機能語（function word）の方が獲得と使用の時期が遅れる。概念形成においては抽象的なものより具体的なものが早期に記憶され保持されていくからなのである。Crystal（1981:116）の臨床結果によれば，

- (21) A language-delayed boy of five had considerable ability at the two- and three-element stages of clausal development, and had a fair command of the associated phrase structures, but his use of auxiliary verbs and verb endings was apparently erratic.

と指摘されており、助動詞や-ing の使い方に混乱を示しているという。例えば、

- (22) a. man walking
 b. man is fall down.
 c. man smiling.
 d. man kick ball.

(Crystal 1981:117)

などにおいて、進行相を表す Be+V-ing の機能的部分の Be や -ing は不十分であったり欠落したりしている。しかし内容語に相当する名詞や動詞の部分は十分獲得されているのである。

ここで英語の場合、屈折語尾の場合はどうであろうか。幼児においては *go* の過去形が *goed* や *wented* になったり *come* の過去形が *comed* になったり、ときに *came* が出ているのに *camed* になったり、*gived* や *gaved* など過渡的な誤った表現が頻繁に生じてくる (cf. Lenneberg 1967: 303)。この negative evidence²¹ として表出されてくる言語学的データ (linguistic data) は決して単純な模倣によるものでないことはすでによく知られているところである。かといって単なる創造的表現というわけのものでもない。-ed は規則動詞を過去形にするための屈折による (inflectional) マーカーの役割を果たしている接尾語である。

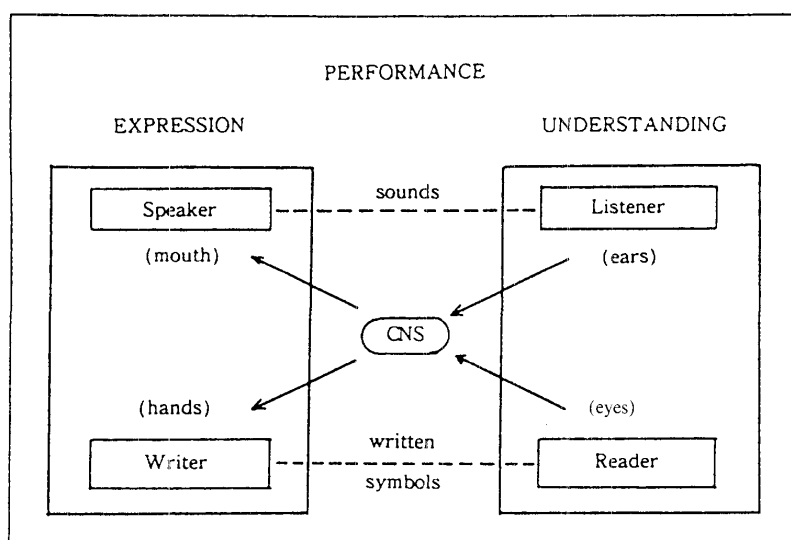
このような過渡的な“誤り”が生じてきてやがて消えていくのは何故か、という問いに対しては、試行錯誤的な類推 (analogy) が働いていると考えることができる。*come* が *came* ではなくまず *comed* が生じてくるのは、動詞なら何でも -ed を付加することによって過去概念を表すことが出来るという類推にもとづいている。しかしこれはやがて周囲の大人達の使っている *came* との関係においてフィードバックされて訂正される。さらに *come* と *comed* の違いは時間概念の差異、*comed* と *came* は用法上の妥当性の差異として訂正されていくのである²²。

ここで「類推」という言い方をしてみたがこれは認知的な概念である。つまりこれはあるものと別のものとの同質性の認知を基礎にして創り出される「連想」(association) のプロセスである。一般的な規則動詞の過去形 V-ed と *comed* は意味論的には過去概念の同質性、形態論的には動詞に対する -ed の付加における同質性を前提にしている。*comed* と *came* は過去概念の同質性を前提にはいるが、しかしこの動詞の文法形式において、周囲の大人たちの使っている習慣的な言い方との異質性が関与している。これは他の多様な動詞のみならず形容詞の *good* と *gooder*, *bad* と *badder* など乳幼児が過渡的に overgeneralization として表出してくるさまざまな表現についてもいえることであるといえよう。

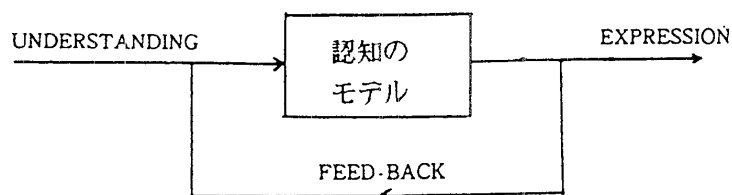
ここで一般に何才になればどういう語彙をいくつ表現できなければならない、とする標準指向の考え方はあまり建設的なものではない。個々の子供のケースによって事情が異なるからである。基本的に言語の表現能力は外に現れた語彙の数よりもむしろ語彙と語彙を組み合わせていくことのできるその組み合わせかたの多様性とその確かさのなかに見い出されなければならない。たとえば、内容語と機能語とを組み合わせるまとまった概念を句または文という形式で次々に創り出していける能力の動向を一人の幼児の発達過程のなかには私たちは見なければならないのである。

4. 言語能力とはどういう能力のことか?

言語能力というときいわゆる4技能として話すこと、聞くこと、書くこと、読むことのプラクティカルな能力として考えることが一般である。しかし問題はこういったプラクティカルな能力が何にサポートされて可能なのかということである。そしてこの何かとは人間のなかに記憶され、内在化されてある認知のメカニズムと密接な関係のあることは言うまでもない。「話すこと」、「書くこと」は表現(output)であり「聞くこと」「読むこと」は理解(input)である。さらに「話すこと」と「聞くこと」は音声でつながれており、「書くこと」と「読むこと」は文字でつながれている。そしてそれぞれに表現の場合は神経生理学的には運動神経、理解の場合は感覚神経が深く関与している。これら4つの側面を統括しているのが大脳中枢(CNS:central nervous system)なのである。下の図はこのことを概略表している²³。



この図において失語症学(aphasiology)的には運動神経と関わって表現をコントロールするブローカの言語野が左前頭葉にあり、感覚神経と関わって理解を引き受けるウェルニッケの言語野が左側頭葉にある。さらにこれは表現と理解に関わるフィードバックのメカニズムとしては次のように図示することができよう²⁴。



ここでいう認知のモデルとは周囲の世界を分ける／分かるという操作的な認知のプロセスにおいて定着されていくべきものと考えることができる。それは文法ルール体系と限定するよりもこれをも含んだもっときめの細かい人間の「知」にかかわってある原理的な認知の体系である。言

い替えればそれはある A という事物／事態と A でない事物／事態とを分け／分かるための差異にもとづくカテゴリー化を可能にしているものであって、人間によって内在化され記憶されてあるゲシュタルト的な認知のモデルなのである。そしてこの認知のモデルによって私たちは周囲の世界をそれとして見たり切ったりしていくのである。

ここで Pinker (1984:14) の指摘について少し触れておきたい。彼は

- (23) I will assume that the child is equipped to learn a rule system conforming to
Bresnan and Kaplan's theory of Lexical Functional Grammar.

といい、プレズナン・カプランの語彙機能文法に見合った「ルールの体系」(a rule system) を学習するのではないかといっている。これはチョムスキーらの生成文法とちがって、変形(移動)の概念を用いずに c(onstituent) structure と f(unctional) structure による構造記述を駆使し、f-structure の記述においては Subject, Object, Predicate などの文法関係を駆使するという特徴をもっている。

この語彙機能文法が幼児の言語獲得についてどれほどの説明力があるかについては即断はできないが、記述の方法としては参考にするべき点が多い。例えば

- (24) John told Mary to leave Bill.

の場合、c-structure と書き換え規則に加えて次のような f-structure を提示している。

- (25)

PRED	"tell (SUBJ, OBJ, V-COMP)"
TENSE	past
SUBJ	[PRED "John"]
OBJ	[PRED "Mary"]
V-COMP	[PRED "leave (SUBJ, OBJ)"]
	SUBJ []
	OBJ [PRED "Bill"]

上のマトリックスはカテゴリー化の在りようをまとめたひとつのモデルと考えることができる。PRED (predicate) は述語動詞を表し発話の核に位置するものである。時制は発話の時間概念を表すもので文においては不可欠のものである。SUBJ, OBJ は argument (項) をなし、PRED に対する意味役割を担っている。

基本的に幼児の言語獲得においては、何が意図されているか (what is intended) は何が言われているか (what is said) を通して伝えられているが、二語文、三語文のみならず、例え一語文であってもそれは I/here/now における発話者の意図と発話の場面を反映した発話行為である。しかし、この語彙機能文法におけるマトリックスにおいては PRED と項 (argument) 構造に重点をおいた統語論上の文の記述・説明方法のひとつとしては参考になるが、幼児の言語にあって一般

的な直示的表現の位置づけ、コヒージョン、コヒアランス²⁵など、照応関係にみられる意味論的、語用論的つながりの問題、用いられている語がカテゴライズしている意味内容の般化(*generalization*)と分化(*differentiation*)の在り様の記述、語の慣例的な(*conventional*)な意味と、類推や推論によって創られた語の新奇な(*innovative*)な意味との連関関係の説明など、必ずしも明確でないものが多く、幼児の発話行為の実体に即した認知能力の発達のプロセスを必らずしも十分に記述、説明するものであるとはいえない。

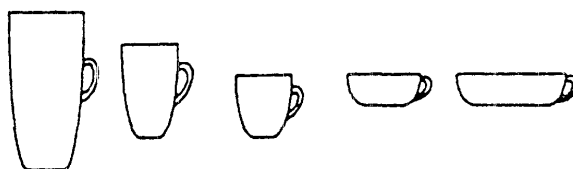
ここで認知能力の問題は言語だけに限らず、いわゆる反転図であるだまし絵の場合を考えてみるとわかりやすい。例えば、よく知られている例であるが、下の(a)は一方で花瓶のように見え、もう一方では二人の人物の顔に見える反転図である。(b)ではプレートの高さや幅を変えるとボウル—マグ—カップ—グラスと境界は定かではないながらある段階から違ったものに見える。

(26)

a.



b.



まずあるものを「かたまり」(ゲシュタルト)として知覚する。次にあるもの(A)をそれとして認知して別のもの(\bar{A})から分けるとき識別と理解がはじまる。そこに記号としての言語が操作的に働いている。さらに、周囲の世界が変化して見えているときここで乳幼児ならずとも私たちも分ける／分かるという認知論的カテゴリー化の営みが差異の識別というプロセスにおいて行われていると考えられる。そしてこのプロセスを「何かそれとして他のものと分けて知る行為」すなわち振り分け(*division*)のプロセスとして考えてみることができるのである。

私たちはアウトプットとして表出した表現が、もしおかしく誤っておればそれを修正してさらに表出をつづけていく。発音においても、文法ルールにおいても、意味付与においても、使用における語用論的な約束ごとにおいてもそうである。Cook(1988:64)もいうように幼児による言語獲得を結果論的には大人による矯正教育の過程とみなしていくこともできよう。幼児の言語獲得の臨床的な伝達障害の問題は自ら発した発話を自らの認知能力において修正・推進することが出

来ないところから生じてくる場合が多い。

このように考えてくると、基本的に言語能力とは、発話者が発した発話が発話としての妥当性があるかどうか自らチェックすることのできる能力の基盤になるものであるといえる。そしてこれは音声、語形成、文形成、意味論、語用論の部門 (component) においてそれぞれに働くものである。

この能力はどのようなもので、何によってサポートされ、可能になっているかという、すでに上で述べてきた分ける／分かるというカテゴリー化のプロセスを前提にして記憶され、内在化されてある認知モデルによってであるといえる。そしてこのモデルは言語記号によって同じもの (同質性) と異なるもの (異質性) を振り分けていく認知のプロセスを可能にさせるような人間の知の原型 (proto-type) につながっていると考えることができるのである。

チョムスキー流の考えでは言語獲得とは普遍文法の個別文法を生み出すためのパラメーターを適切に処理できるようになることを意味している²⁶。そして普遍文法とは子供の精神 (mind) 内に原理とパラメーターのシステムとして内在化されているものと考えられる。例えば、英語の場合は前置詞の使用に見られるように文法的ヘッド前置、日本語の場合は後置詞 (助詞) の使用に見られるように文法的ヘッド後置となるのはパラメーターの違いというわけである。しかし普遍文法とはいったい何なのか、それは明示的に抽出したり形式化することが出来るのであろうか。それがパラメーターを違えることによって生じてきたエラーや overgeneralization とどう関係するのか、未だ不明な点が多いと言わざるをえない。

5. 結び

まず、一般的に言語は「伝達的手段」として考えられてきている場合が多い。これは言語による相互伝達 (コミュニケーション) の成功を目標にした言語の道具性を尊重した立場である。グラリス (1960) の協調の原理 (Cooperative Principles) の4つのマクシム (maxims) はこの考え方を前提にしたものである。またこの考え方からは便利なもの、役に立つものとしての言語観が反映されている。そしてこの考え方の基盤には人間は社会的存在としての機能性が大きく考慮されている。しかしこの考え方が上すべしすれば、人間をも機能的に便利で役立つ人が価値があって、不便で役立たない人が憂き目を見るということになってしまうかもしれない。このような場合、吃音など伝達にハンディキャップをもっている人々は辛い立場に立たされることになる。

またこの考えでは人間は言語によって思考をなし、周囲の世界を秩序づけ、イメージやメンタルスペースの世界をもち、数々の「知」の営みを果たしていく根拠となる人間の内にあるダイナミックなメカニズムについて十分触れることはできない。

第二に、言語は精神の鏡 (mirror) であるという反映論がある。チョムスキーの理性主義的な言語観はこの観点に立っている。言語が使われている場面やコンテキストから自立し、形式化されうる抽象的な言語の「実体」が存在し、それがすべての言語に普遍的に存在するとする立場である。ここでは言語の抽象的な形式化がきわめて重要なものとなる。事実いまでもチョムスキーはモジュールの視点を導入しながら言語の普遍文法の追求を言語理論の最重要なものとしている。

しかしこの考え方は言語使用の微妙な認知様式の多様性から目をそらせ勝ちになる。また、行為としての言語という視点が抜けている以上言語のダイナミックな表現と理解のメンタルな作業 (task) としてのプロセスを、発話のコンテキストからの情報を考慮に入れつつ、妥当性をもって

捉えることはできにくい。

第三に、ここでは、言語とは認知のプロセスとして生命体としての人間の生存の証しという視点を導入してみたい。この世に生を受けた人間は言語に関わってまず分けること／分かること、つまりあるものと別のものとの差異を認識し、範疇化 (categorize) していく過程で言語記号を獲得し、これを操作的にメンタルな作業として使用し、理解していく。この過程は生命ある存在としての人間の認知的な行為のプロセスである。

人間は生命体である以上生存に関わってもつ欲求の必然性がある。周囲の世界を知り、秩序づけていく「知」の主体でもある。言い替えれば、人間の人間たる由縁は「知」によって支えられているといえる。この人間の「知ること」あるいは「分け／分かること」の認知のプロセスは言語に関わって根本的なものである。乳幼児は発音も語彙形成も十分ではなく、いわゆる片言でろれつが回らない。しかし、命ある存在として「私がここにこうして存在しています。」ということを言語によって証ししていく主体に違いないのである。

乳幼児の周囲との関わりの知的出発点は分ける／分かるという差異化現象にもとづく範疇化 (categorization) のプロセス、つまり認知的行為であるといってきたが、これは生命体としての人間である乳幼児の生存の証しとして蓄積されていく。言い替えれば、乳幼児はこの世に生を受けてからこの分ける／分かるという認知的プロセスを通して、知に関わって自らの生存の在りようを証し続けていくのである。そして人間は知の主体として表現と理解を繰り返しながら発達を遂げていく。この観点から言えば、言語に関わって人間の人間たる由縁とは、知の発生によって支えられている、といえよう。従って言語とは何かといえ、それは知の発生を証しするもの、人間の知の発達を根本において支えているものとして考えられるのである。そして結果として生命体としての人間の始まりにおいて、言語とは人間の生存を証しする認知的存在として位置づけられるのではないであろうか。

【注】

1. ここではルソーの自然説やヘルダーの理性説などの言語起源論に加えて、野生児 (feral man) といわれるインドのアマラ、カマラ、アヴェロン野生児のヴィクトール、そして最近のジニーなどの言語獲得のことを考慮に入れている。
2. 『発生的認識論序説』において彼は「重要なのは構築の法則である。いいかえれば前進的に構成されつつある操作的な体系である」といっている。ここでは人間は感覚運動的段階から言語を代表とする概念化された操作的思考、象徴の段階に向かって発達していくというピアジェ流の考えを考慮に入れている。
3. ここではチョムスキーの言語理論の研究対象である I 言語 (Internalized language) のリサーチのことをいっている。これは人間の精神 (mind) に内在する言語能力 (competence) のことであるが、具体的な E 言語 (Externalized language) とは違ってその実体は抽象的で実験的、臨床的には捉えがたい面があるといえよう。
4. これは Reading 大学にいた David Crystal, Paul Fletcher, Michael Garman の三人で考案した言語発達上ハンディキャップ (language disability) のある子供のための評価 (assessment) と診断 (remediation) のためのチャートである。段階 (stages) は次の 7 つに分かれている。(i) sampling (ii) transcription (iii) grammatical analysis (iv) structure count (v) pattern evaluation (vi) statement of remedial goals (vii) statement of remedial procedures
5. ここでいう認知モデルについては、Lakoff (1987:13) は次のように述べているところは参考になる。
Cognitive models structure thought and are used in forming categories and in reasoning.

Concepts characterized by cognitive models are understood via the embodiment of the models.

6. 元来 speech pathology といわれていた分野である。これが数多くのケースを含み、speech と language 両側面を含み、より広い概念として communication disorders となり今日アメリカの大学などではこの名前が一般である。
7. この用語は Crystal (1981) においてはじめて書名としてはっきりと用いられ、知られ、広く受け入れられるに至った。
8. 基本的に記号とそれが指示する対象との関係においてアイコンは図像記号あるいは類似記号といわれ、写真や地図、略図、音声であればオノマトペが典型である。「インデックス」は記号はその対象と物理的につながっていて、その対象がとり除かれたとき直ちにその記号としての機能を失うような場合である。風見と風の方向、火と煙の関係などがこの例である。
9. Quirk et al. (1985:74) によれば、オノマトペは比較的自由に解放クラス (open class) の語を形成することができ、叫びや感嘆など expressive vocalization を伴った新奇の感嘆詞 (nonce interjections) の形をとる、とされている。
10. Deixis には place, person, time と大きく 3 種類あるが place を表す deictic word が通例最初に出現してくる。in there / there little / two on there / car there などの例が Crystal (1981:111, 112) にみられる。
11. I/here/now における発話においては認知発達的に具体から抽象へという方向性をもつ。直示 (deixis) を表す語と名詞が述語動詞に先だって出現してくることはよく知られている。
12. これは論理実証主義 (logical positivism) 的な立場における「意味」の捉え方として大きな影響力をもっている。ここでは sense data にもとづく論理計算による真偽の検証のプロセスのことである。
13. この頃に出現してくる発話をまとめて「電報文体」(telegraphic speech) と総称されているが、これは主として感嘆詞、直示語、内容語 (名詞、動詞、形容詞、副詞) などが中心になっている。
14. ここでいう「拡張」は語彙範疇 (lexical function) だけではなくむしろ機能範疇 (functional category) の積極的な獲得のことを示している。むしろ名詞においては数の概念、動詞においては時制や相の概念、そして名詞句が動詞句に関わる項構造など機能範疇の言語獲得において果たす役割は大きい。
15. 結果として「言語が思考を形つくる」(“Language shapes thought.”) というサピア・ウォーフの言語相対論が形成されていくと考えることができよう。
16. この〈対話の成立〉に関しては「三項関係の成立」が重要な役割を果たす。つまり、村田 (1984:71) に従って三項関係とは〈自己 (乳児) が他者 (大人) との間に対象 (物) を介在させて、相互に関わりあう関係〉である。
17. Jakobson (1960) によれば、他に emotive, referential, poetic, metalingual のそれぞれの機能 (functions) があり、相互伝達 (communication) における言語の機能・役割が適切にモデル化されている。後に Jakobson (1980:81) の “Metalanguage as a Linguistic Problem” のところで触れて詳述されている。
18. 北原 (1994) はこうもいっている: 「分かる」は「判る」「解る」など漢字も当てられるが、自ずから分かれる、分けることができる、というのがその基本義のようである。
19. 命名 (naming) はカテゴリー化の典型である。あるものと別のものとを分け／分かつという認知行為は幼児の発達の初期にあって、特にその言語獲得過程においてはきわめて重要なひとつのステップである。言語記号による命名は周囲の世界をどう見るか、どう切るかという認知の問題と密接な関係にある。
20. この「連関性」を認知する結果として周囲の世界を構成する要素間の意味関係あるいは意味役割の総体としてこれを構造的にみることができるようになる。
21. これについては Pinker (1989:6) は言語獲得過程において果たす negative evidence の果たす役割を次のように指摘している。

As a result it is commonly assumed that children do not depend on negative evidence to acquire a language.

22. Lenneberg (1967:303-304) は inflectional endings として具体的な例を述べながら、この傾向は長期にわたり、しばしば学童期になるまでつづく場合のあることを指摘している。
23. この図は Nishikawa (1979) の「表現と理解のモデル」の中で提案したものである。
24. ibid.
25. コヒージョン (cohesion) は Halliday and Hasan (1976:4) に従って意味論を前提とした「つながり」の謂いである。彼らは次のようにいっている:

The concept of cohesion is semantic one ; it refers to relations of meaning that exist within the text, and that define it as a text.

コヒアランス (coherence) はテキスト言語学上の概念で、テキスト解読上の意味的な「つながり」である。

26. Cook (1988:74) は子どもの精神にあるパラミターは、いはば組み込みスイッチのようなものであり、耳に入る言語に合わせてオン/オフそれぞれのスイッチが設定される (The parameters in the child's mind can be thought of as built-in switches, each to be turned to suit the language that is heard.) としている。

【参考文献】

- Aitchison J. (1976) *The Articulate Mammal—An Introduction to Psycholinguistics*—, Hutchinson, London.
- Bloom, L. and M. Lahey (1978) *Language Development and Language Disorders*, John Wiley & Sons, New York.
- Bresnan, J (1981) “A Realistic Transformational Grammar” in Halle, M. (eds.) (1981:1-59).
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language—Its Nature, Origin, and Use*,—Praeger Publishers, New York.
- Cook, V. (1988) *Chomsky's Universal Grammar, An Introduction*, Blackwell, Oxford.
- Crystal, D. (1971) *Linguistics*, Penguin Books.
- (1979) *Working With LARSP*, Edward Arnold, London.
- (1981) *Clinical Linguistics*, Springer-Verlag, Wien, New York.
- Crystal, D., P. Fletcher and M. Garman (1976) *The Grammatical Analysis of Language Disability*, Edward Arnold, London.
- Davis T. (ed.) (1991) *Pragmatics*, Oxford University Press, Oxford.
- Goodluck, H. (1991) *Language Acquisition, A Linguistic Introduction*, Blackwell, Oxford.
- Grice, P. (1960) “Logic and Conversation”, in Davis (ed.) (1991:305-315).
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Halle, M. (1981) (eds.) *Linguistic Theory and Psychological Reality*, The MIT Press Press, Cambridge, Massachusetts.
- Halliday M. A. K. and R. Hassan (1976) *Cohesion in English*, Longman, London.
- Imanishi, N. (1987) (今西典子) 『照応表現とその習得』 in 大津 (編) (1987:35-78).
- Jackendoff, R. (1985) *Semantic Structures*, the MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Jakobson, R. (1960) “Linguistics and Poetics”, in Sebeok (ed.) (1960:350-77).
- (1966) “Linguistic Types of Aphasia”, “Child Language, Aphasia, and Phonological Universals”, 『失語症と言語学』, <服部四郎 (編) 監訳 (1976)>, 岩波書店.
- (1980) *The Framework of Language*, Michigan Studies in the Humanities, University of Michigan.
- Jakobson, R. and K. Pomorskaya (1980) *DIALOGUS par Roman Jakobson*, Krystina Pomorska (Traduits du russe par Mary Fretz), 『詩学から言語学へ—妻ポモルスカとの対話—』, <伊藤晃・訳 (1983)> 国文社.
- Kitahara Y. (北原保雄) (1994) 『「分ける」と「分かる」』, 日本語論 Vol. 2, No. 2, 山本書房.
- Lakoff G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Chicago.
- Lenneberg, E. H. (1967) *Biological Foundations of Language*, John Wiley & Sons Inc. New York.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Maruyama K. (丸山圭三郎) (1983) 『文化記号学の可能性』, 日本放送出版協会.
- Murata, K. (村田孝次) (1984) 『日本の言語発達研究』, 培風館.
- Nishikawa M. (1979) “Metaphor”, *Memoirs of the Faculty of General Education, Kumamoto University*, No. 14.

- Ootsu Y. (ed.) (大津由紀雄・編) (1987) 『ことばからみた心』 (生成文法と認知科学), <認知科学選書 13> 東京大学出版会.
- Okamoto, N. (岡本夏木) (1985) 『ことばと発達』, 岩波書店.
- Piaget, J. (1956) *L'epistemologie Genetique*, 『発生的認識論』 <滝沢武久・訳 (1972)> 白水社 (クセジュ N. 1399).
- (1950) *Introduction A L'epistemologie Genetique* 『発生的認識論序説』 (第1巻, 数学思想) <田辺振太郎, 島雄 元・訳 (1975)> 三省堂.
- Pinker, S. (1984) *Language Learnability and Language Development*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- (1989) *Learnability and Cognition*, the MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Portmann, A. (1951) *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen* [『人間はどこまで動物か』] <高木正孝・訳 (1961)>, 岩波書店.
- Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Sebeok, T. (ed.) (1960) *Style in Language*, Cambridge, Massachusetts.
- Shibata, J. (柴田治呂) (1990) 『赤ちゃんのことば』, 刀水書房.